第7回　因幡薬師と鉄輪井

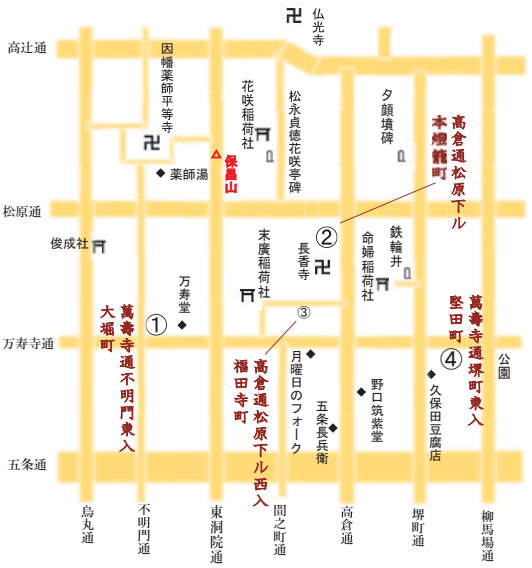
■ 因幡薬師の不明門

今回は、町名看板「万寿寺通不明門東入大堀町」①から出発しましょう。この看板の「不明門」を「あけず」とは、なまなかでは読めませんね。「不ㇾ明」というようにレ点がついて、しかも「門」は読まないのですから、京都の難読地名の中でも上位にきます。

萬壽寺通　不明門東入　大堀町①

不明門通は、大通りの烏丸通の一筋東。前に述べた天正の地割で、烏丸小路と東洞院大路の間に新設された通りです。この通りの北の突き当たりが因幡薬師（因幡堂）平等寺で、その門がいつも閉まっていたことに由来しています。とはいっても、正面の南門がいつも閉まっているというのは、町堂（町衆が会合のときに使っていたお堂）としては考えにくい。多分、なにかの騒擾のときに、南門を閉めて長期間立てこもって因幡堂を守ったことがあったのではないかと推測されます。

写真に示すように、今は、開かずの門はなく、南から、因幡薬師（烏丸松原上ル東入因幡堂町）に参ることができます。そういえば、東寺にも「不開門」がありますね。こちらのほうは、足利尊氏が新田義貞と戦ったときに閉めて難を逃れて以来、開いていないそうです。



仁丹町名看板の所在（東洞院通の高辻から五条まで）

烏丸小路と東洞院大路というと、今は、烏丸通のほうが東洞院通よりも道幅が広いので、奇異に感じますが、平安京では、烏丸小路は幅四丈（約十二メートル）に対し東洞院大路は幅八丈（約二四メートル）です。ちなみに現在の烏丸通の道幅は、約三十メートル。道幅だけからみても、平安京の都市計画の壮大さがわかりますね。

現在の因幡薬師は、京都市街の寺院としては、中規模の境内ですが、往時は、多くの堂宇が並んでいました。本シリーズ第1回で、『上杉本洛中洛外図屏風』の一部を引用しましたが（図1・1）、その中でも大きく描かれています。

『都名所図会』には、往時の広壮な境内の鳥瞰図が載っていますので、引用します。この図の左翼、左下隅の橋のたもとに「五条三位俊成の社」とありますから、大体の位置関係がわかります。ここに描かれた水路は現在はないので詳細は不明ですが、五条通（現在の松原通）を東西に流れる溝川か、周囲の堀でしょう。

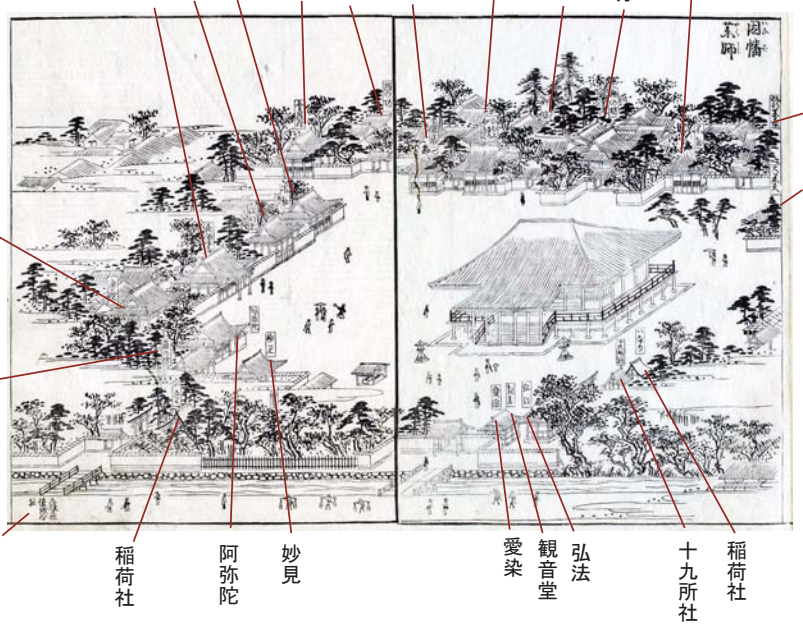
引用した図を仔細に見ると、境内の建物に名札がついています。本堂の周りには、鎮守の十九所社（図右翼の右下）、観音堂（図右翼の右下に愛染、弘法の囲み文字とともに）、執行薬王院（図右翼の右上、大黒天とともに）、柳の坊（図右翼の左上、秋葉、稲荷、氷室、虚空蔵とともに）、桃の坊（図右翼の上中央）、西の坊（図左翼の右上、金毘羅とともに）、桂芳院（図左翼中央

因幡薬師（因幡堂）　平等寺

だが表示なし、不動、役行者のところ）、長伯寺（図左翼中央）、金蓮寺（図左翼中央だが表示なし、阿弥陀、妙見とあるところ）、角の坊（図左翼中央、稲荷とともに）が立ち並んでいる様子が描かれています。

■ 国宝『因幡堂縁起』

因幡薬師の創建については、『因幡堂縁起』（国宝、現在国立東京博物館蔵）が残っています。これを要約した駒札によると、「長徳三年〔九九七〕因幡国司橘行平が、任期終了後、京都に帰ろうとしていたときに重い病にかかった。夢のお告げにより因幡賀露津の沖から一体の薬師如来を引き上げて、仮堂に安置したところ、行平の病は平癒し、京に帰ることができた。帰洛後、失念していたところ、長保五年〔一〇〇三年〕に、夢に薬師の化身の僧が現れ、京に来たことを告げた。目が覚めて、門をあけると、飛来した薬師像がそこにたたずんでいた。驚いて、自宅を改造し、碁盤を台座にして祭った。これが因幡堂のはじまりである。承安元年〔一一七一年〕に高倉天皇により平等寺と命名された」と。現在の堂宇は、明治初年の再建。本尊の薬師如来立像は、藤原時代の一木作りの優品で重要文化財に指定されています。通常は、非公開。この薬師如来立像は、『都名所図会』の記載によれば、当時から、信濃善光寺の阿弥陀如来像、嵯峨清涼寺の釈迦如来像とともに日本三如来といわれています。



『都名所図会』巻之二 因幡薬師の図。
（国際日本文化センター「平安京都名所図会データベース」より引用）

■　江戸笑話と因幡薬師

本尊薬師如来立像が碁盤の上に立っているのは、京都に飛んできたときに、因幡に台座を置いてきたので、因幡堂を建てるときに、碁盤で代用したという言い伝えがあります。これに関しての、笑話。

にはか道心起し、新佛一體のぞみて、佛師所へ行、大座後光のせんさく申折ふし、「それに付、京の因幡堂の本尊薬師如來は碁盤に乗らせ給ふが、あれはめづらしき大座にて侍る。何と謂れの有事か」といへば、「成程いはれもあり、尤成事なり」といふ。「其子細は」「あのいなば堂は四町にかゝつた」といふ。

『軽口露がはなし』巻の四・十一「新佛一體の望」
『江戸笑話集』小高敏郎校注、日本古典文学大系100、岩波書店、一九六六

「大座」は「台座」の当て字。「因幡堂の本尊因幡薬師がなぜ碁盤の上に乗っているのか」の問いに、「因幡薬師は因幡では網にかかり、京の因幡堂ではしちょう（征）にかかったのだ」と。そのこころは、「因幡堂の境内は四町にかかるほど広いので、本尊も、碁盤のうえで征にかかったのだ」という洒落です。笑話として通用するほど、因幡薬師が庶民のあいだに浸透していたということですね。

ところで、囲碁用語の「征」は、説明がむずかしい。わたしなりに説明をこころみると、「相手の石をあと一手まで追い込んだ状態（「あたり」）のうち、相手方が逃げても、「あたり」を続けて碁盤の端まで追いかけることができ、結果的に取ってしまえる場合。相手が二手連続で着手しないかぎり、取りきっているとみなしてもよい状態」となります。囲碁をかじっていないと、どう説明してもわかりにくいですね。

因幡薬師は秘仏で、実際に見たわけではありませんが、非常持ち出しのため、頭に座布団を被っているそうです。これも、街中で何度も火災にあった寺院ならではの工夫です。それだけ、町衆がこの尊像を大切にしてきた証ですね。そこで、もう一つ、因幡薬師の笑い話。

「因幡堂の薬師さんは、なぜ碁盤の上に乗っているのか。」
「閻魔さんと囲碁を打って、負けたので、腹いせに盤面を崩したのさ。」
「なぜ、そんなことがわかる。」
「頭に座布団をかぶっているのが、その証拠。閻魔さんの笏で打たれるのが怖くて、急いで座布団をかぶったのさ。」

この笑話の出典は、詳らかではありません。たまたま、わたくしめの抽斗の中からでてきた書物（題名不詳、著者の名は、艸蟲齋多什と幽に読める）に載っておりました。この笑話で「腹いせ」などと失礼なことを申しあげましたが、とくに薬師さんには作者になり代わりおわびもうしあげます。

■　狂言と因幡薬師

因幡堂あるいは因幡薬師は、今日の規模からは想像できないくらいに、狂言の題材として多数出てまいります。因幡堂が、狂言の興行場所になるなどの関係があったのではないかと推測されます。二〇〇三年、因幡薬師で千年祭があり、狂言の『因幡堂』と『鬼瓦』が茂山一門により上演されました。『狂言記』〔橋本朝生、土井洋一校注、新日本文学大系五八、岩波書店、一九九六〕に、これらの狂言の概要が載っていますので、かいつまんで紹介します。

狂言『因幡堂』〔同書所載『新版絵入狂言記・外五十番』一・八〕。大酒のみの女房をもった男が、離縁して女房を実家に帰します。「女房の事を通夜して御夢想次第に持ちませう」と、新しい妻を得ようと因幡堂の薬師に願掛けにゆきます。これを聞き伝えた女房は、因幡の薬師になりすまし、「やいやい、西門に立つたを女房に持てよ」とお告げ。西門にみたてた橋掛かりへ先回りして、被衣をかぶって待つ妻。男は古女房とは知らず、背負って宿所（舞台）へ同行。男「ここでござる、下りてその被衣を取られまらせい」。女房「いやまづさかづき事をしませう」。祝言の席で、新妻も大酒飲み。被衣をはぐと、もとの女房。男は「まづ談合してから」と逃げ腰。女房は「やるまいぞ、やるまいぞ」と追いかけるという筋。

狂言『鬼瓦』〔同書所載『新版絵入狂言記・外五十番』三・九〕。訴訟に勝って国に帰ることになった大名。冠者を呼び、「つねづね因幡堂を信じて有により、御利生と存る、御暇乞に参詣してから下らふと思ふ、供致せ」。冠者を供に因幡堂にお参りにでかけ、このような堂を国にも建てたいと、仔細に造作を見ます。鬼瓦が目にとまって、大名「あの屋根の角にあるものは何じゃ」。冠者「鬼瓦と申物で御ざる、見事に致して御ざる、殿様はなぜ泣かしらるるぞ」。大名「鬼瓦はそのまま女房共の顔じや、それで泣く」。冠者「みますれば、御内義様によく似せて御ざる」。見れば見るほど、国許に待つ妻に似ているので、思いだしてひとしきり泣いたあと、大名「冠者、よい仕合で国へ帰る、目出度、泣く所ではない、めでたふ笑ふて下向致さう」と最後は二人で笑って終わるというあらすじです。

そういえば、厄除方除に、因幡堂鬼瓦のレプリカを売っておりました。単身赴任のお父さんにぴったりのグッズです。

因幡堂鬼瓦

■　祇園祭・保昌山

因幡薬師の門前に銭湯「薬師湯」があります。その路地を東へ抜けると東洞院通。この場所に、祇園祭のときに、「保昌山」

（東洞院通高辻下ル燈籠町）が建ちます。平井保昌（藤原保昌）の花盗人の伝説にちなむもの。当初は「花盗人山」といわれていたらしい。前懸と胴懸の図柄は、円山応挙の下絵によるもの。円山応挙の下絵も屏風に仕立てて残っています。保昌山の会所は、享保十九年〔一七三四年〕に現在の敷地に置かれ、建物は、明治三年〔一八七〇年〕の造営。祇園祭の町会所として古い姿を残していて貴重なので、京都市指定有形文化財となっています。

保昌山の由来になった保昌の伝説は、「恋する女房に頼まれて御所の梅の枝を折り、警備の武士に、矢で髪を射抜かれた」というものです。この女房が、和泉式部であるということになって、保昌山の由来となったと推測されます。この伝承にちなんで、保昌山では、宵山のときに「縁結び・盗難除け」の護符を配布しています。

平井保昌（藤原保昌）〔九五八～一〇三六〕は、和泉式部の最後の夫。平井の姓は、摂津国平井に住んだことによります。保昌が丹波の国に国司となったときに和泉式部も一緒に赴任しています。和泉式部の娘小式部内侍（最初の夫橘道貞との間の子）に関する出来事として、『金葉和歌集』には、詳しい詞書とともに、百人一首にも採られた歌が載っています。

和泉式部保昌にぐして丹後国に侍りけるころ、都に歌合のありけるに、小式部内侍歌よみにとられて侍りけるを、中納言定頼つぼねのかたにまうできて、歌はいかゞさせ給、丹後へ人はつかはしてけんや、つかひもうでこずや、いかに心もとなくおぼすらんなど、たはぶれて立けるをひきとゞめてよめる。

小式部内侍

大江山いく野の道の遠ければ
まだふみもみず天の橋立

金葉和歌集巻第九・雑部上・五五〇

定頼が、「丹後にいる母の和泉式部に手紙を書いて、教えてもらわなければ、ろくな歌はできないだろう」と揶揄したのに対して、この歌を即座に詠んで、みごとに一本取ったという話。この挿話は、『十訓抄』〔作者不詳、一二五二刊。浅見和彦校註訳、新編日本古典文学全集五一、小学館、一九九七〕の第三「人倫を侮らざる事」（第三ノ一）のなかに引用されて、「軽々しく他人を馬鹿にしてはいけない」という教訓話となっています。

ちなみに、「歌よみにとられて侍りける」というのは、「歌合の歌人として選ばれた」というほどの意味。「とる」という日本語は曲者。「取る」、「採る」、「撮る」、「盗る」、「捕る」、「執る」、「摂る」、「録る」などと漢字を当てはめればわかるように、前後の関係で意味がさまざまに変わります。この場合は、「採る」とするところです。

保昌と和泉式部との関係でいえば、『詞歌和歌集』に次のような歌が残っています。

保昌にわすられて侍けるころ、兼房朝臣のとひて侍りければよめる

和泉式部

人しれず物おもふことはならひにき
花にわかれぬ春しなければ

詞歌和歌集巻第九・雑上・三一二

「訪れのないのはもう慣れっこになってしまった」と、言い寄ってきた兼房朝臣をやんわりと断っています。さらに、『後拾遺和歌集』には、貴船神社に参り、憂鬱な心境を蛍に託した歌が採られています。

男にわすられて侍けるころ、貴ぶねにまいりて、みたらし河に蛍のとび侍けるをみてよめる　　和泉式部

物思へばさはのほたるもわが身より
あくがれ出る玉かとぞみる

後拾遺和歌集巻第二十・神祇雑六・一一六二

御返し

おく山にたぎりて落る滝つ瀬の
玉ちるばかりものな思ひそ

この歌はきぶねの明神の御返しなり。男の声にて和泉式部が耳に聞こえけるとなんいひつたえたる。

後拾遺和歌集巻第二十・神祇雑六・一一六三

和泉式部が貴船神社に詣でた話に尾ひれがついて、『沙石集』〔無住、一三二七年頃成立。小島孝之校註訳、新編日本古典文学全集五二、小学館、二〇〇一〕巻第十末ノ十二では、保昌の寵を取り戻すために、巫女に「敬愛の祭り」（密教の五種壇法の一つで、親子・兄弟・夫婦の和合を祈る修法。ただし、巫女がおこなっているのは、おそらくは民間呪術）をしてもらうところを保昌が木陰に隠れて見るという話に変わっています。巫女が「鼓を打ち、前を掻き上げて叩きて、三度廻りて、」このようにしなさいと言ったが、和泉式部があまりに恥ずかしいので躊躇したところを、保昌が見て、いじらしいと思い、よりを戻したということになっています。下品な説話になっていますが、杓子定規に格式を守るのも考えものという教訓話です。多分、この教訓話の作者は、「貴船明神の返しの歌は、あとをつけてきた保昌の仕業ではないか」と思ったのでしょう。

藤原保昌に関しては、その妻和泉式部との関係が面白いために、たくさんの説話にでてきます。上に引用した説話のほかに、『沙石集』巻第五末には、和泉式部に関連する説話が集められていますが、その一つ。

保昌に思はれてありけるに、道命まめ男にて通ひけるが、ある時、保昌、俄に来る。隠るべき所なくて、鎧唐櫃に入れて置きたるを、保昌、「さよ」と知りて、「この鎧、日に干せ」とて、取り出しければ、「ただ今恥ぢがましき事出で来なむ」と、二人ながら肝心なかりけるに、保昌は、蓋をしたまま祇園社へこの櫃を持ってゆき、「御供にしたいと、執行の御房に頼んでほしい」と。取次ぎの所司・神人が探したが「執行の御房」は見つからない。実は、「執行の御房」とは、道命のこと。「まめ男」とは、ここでは間男のこと。保昌の剛毅と皮肉屋の面が躍如としています。道命と和泉式部との関係は、本シリーズ第３回の松原道祖神社のところでも出てきましたので、覚えていらっしゃるでしょう。ただし、ここにあげた『沙石集』の説話についていえば、類似の話が、『今昔物語』巻二八第十一「祇園の別当戒秀誦経に行はるる語」に、受領の妻と戒秀の話として載っています。

武人としての保昌についても、説話がいくつか残っていて、能の題材になっています。能『大江山』は、源頼光が大江山酒呑童子を退治する話をもとにしていますが、その中に

さてもこの度丹波の国、大江山の鬼神の事、占方の言葉に任せつつ、頼光保昌に仰せつけらる

と保昌が出てきます。シテは酒呑童子ですが、主役はむしろワキの頼光とワキツレの保昌・四天王（渡辺綱、坂田金時、卜部季武、碓井貞光）など数人。ひと昔前の童話になっていますので、ご存じの通りの筋です。

能『羅生門』は、渡辺綱の羅生門の鬼退治の話ですが、その発端は、源頼光〔九四八～一〇二一〕が、四天王のほかに保昌を交えて開いた酒宴。保昌が「この頃不思議なる事を申し候。九條の羅生門に鬼神の棲んで、暮るれば人の通らぬ由を申し候。」といったのに対して、渡辺綱が「いかに保昌。すぢなき事な宣ひそ。」と反論。口論が始まり、「いやしくも都の南門にあたるところに鬼など棲むはずはない。見にゆくのが怖いとおもわれてはかなわない。」と羅生門に出かけてゆきます。羅生門に確かにきたという標の札を置いて、渡辺綱が帰ろうとすると、うしろから、鬼が兜の錏をつかみます。斬り合いの末に、鬼の腕を切り落とすという筋。

藤原保昌は、『宇治拾遺物語』巻二・十（第二八話）の「袴垂合二保昌一事」にもでてきます（『今昔物語』にも同様の話が載っています）。袴垂は、伝説上の盗賊で、捕らえられたのちに、保昌と出会ったときに迫力に気おされたことを語るという筋になっています。そのあと、保昌が袴垂を自分の屋敷に導きいれるというのが腑に落ちない。誰しもそう感じるらしく、袴垂は、保昌の弟の保輔ではないかとも伝えられています。同じ『宇治拾遺物語』巻十一・二（第一二五話）に、「保輔盗人たる事」には、保輔が盗賊として出てきます。

町名「燈籠町」は、平清盛の長男重盛の創建した燈籠堂が、東山小松谷より、ここに移ってきたことによります。この燈籠堂は、後花園天皇により浄教寺の名を賜ったが、荒廃。再興ののち、豊臣秀吉の京都改造の際に、寺町通四条下ルに移されました。

■　松永貞徳と花咲稲荷

東洞院通の一筋東の通りは、間之町通。この通りは、この部分でいったん途切れて孤立した形になっていますが、松原通から復活して、さらに南に延びています。ここで紹介するのは、花咲稲荷社（間之町通松原上ル稲荷町）。鳥居の左脇に「松永貞徳花咲亭址」の碑が残っているように、松永貞徳（号は「花咲亭逍遥軒」）が隠居後に住んだ花咲亭の鎮守であったと伝えられています。

『都名所図会』には、「花開稲荷社」として載っていて、「松原高倉の西にあり。稲荷町といふ。此所は、松永貞徳翁が居所にして、俳書御傘を撰す。」と紹介しています。そのあと、貞徳の家集から、歌を三首引用しています。夕顔の花を読んだ歌のあとの一首。

五條の宿にて夢想、稲荷の社の跡有りける。歌人の此花さきの陰にきて、此所むかし花さきとこそいひ侍らめと

花咲稲荷社

「松永貞徳花咲亭址」の碑

の歌意の思をなして　貞徳

萬代をみつのやしろの春秋は
花さきみのれことのはの道

『都名所図会』の著者秋里籬島〔生没年不詳〕が、三首をこの順に配列した意図は、「この歌に詠い込まれた花が夕顔である」のを示すことであろうと思われます。実際、後述するように、花咲稲荷社の近くに夕顔墳がありますので、この歌に詠い込まれた花は、源氏物語に出てくる夕顔の花とみて間違いないでしょう。さらにいえば、新古今和歌集巻第三・夏歌・二七六の「夕がほをよめる」と詞書のある歌（後出）を踏まえている思われます。その中には、「ことのは」という言葉がでております。

松永貞徳〔一五七一～一六五三〕は、江戸初期の歌人・俳人。和歌を細川幽斎〔一五三四～一六一〇〕、連歌を里村紹巴〔一五二四～一六〇二〕に学びましたが、堂上に留まることなく、地下（一般）に、和歌や歌学を三条衣棚の私邸で教えました。晩年は、俳諧の指導者となり、貞門俳諧として一派をなし、後世に名を残すことになります。とくに、一六五一年〔慶安四年〕に『俳諧御傘』を俳諧式目として執筆し、俳諧の確立に寄与しました。本シリーズ第５回にでてきた北村季吟は高弟。その子は松永昌三〔只五〕。俳諧は連歌に俗言や滑稽を取り入れたものとし、連歌や和歌の入門段階と位置づけており、このことが、その後の談林俳諧や蕉門俳諧とは異なっています。この間の事情は、『芭蕉とユーモア』〔成川武夫、玉川大学出版部、一九九九〕に要約されているので、興味ある方はご覧ください。

貞門俳諧が皆目わからないというのは、本歌取りなどの手法を、和歌や連歌から受け継いでいるからです。その典拠を知らなければ、手も足もでない。島津忠夫「注釈のいる文芸」（『芭蕉の本第五巻・歌仙の世界』、山本健吉編、角川書店、一九七〇）では、このことを指摘しています。たとえば、『貞徳百韻自註』〔一六七〇年頃〕には、「哥いづれ小町おどりや伊勢踊」を発句とする百韻のなかに、自注として次の例があります。

滝御らんじにいづる院さま
とりあへず天神殿は手向（たむけ）して

亭子院（ていじのゐん）、大和龍門（りゆうもん）のたき御覧じに御幸の時、菅家、「このたびはぬさもとりあへず」の尊詠有

このように自分で注釈をつけなければならないということが、すでにある程度の教養を前提にしているということですね。菅原道真の歌の「とりあへず」は、「ぬさ」が動作の対象になっていますが、『貞徳百韻自註』の「とりあへず」は対象がなくなって、単なる接続句になっています。このため、意味が多少ずれているわけで、この意味のずれにおかしみがでてくるわけです。こんな理屈ッポイ注釈を付けると、折角（せっかく）のおかしみも飛んでなくなってしまいますね。もっとも、菅原道真の歌は百人一首に採られていますので、比較的わかりやすいといえます。本シリーズ第４回では、菅原道真の同じ歌を引用し、朱雀院の御幸のときとしましたが、亭子院も朱雀院も同じ宇多上皇のことです。

■　長香寺と末広稲荷社

天正の地割〔一五九〇年、天正十八年〕で新設された間之町（あいのまちどおり）通がこの万寿寺通と松原通の間で、途切れています。つまり、この一町は、天正の地割の犠牲を免れているわけです。南に進むために、一筋東の高倉通を歩きますと、町名看板「高倉通松原下ル本燈籠町」②があります。

高倉通（たかくらどおり）　松原下（まつばらさが）ル　本燈籠町（ほんとうろうちょう）②

この町名看板の南に長香寺（高倉通松原下ル樋之下町）があります。この一画には、福田寺が慶長三年〔一五九八年〕に移転してきましたが、間をおかず、慶長年間〔一五九六～一六一五〕に再移転したといわれています（『京都市の地名』）。現在同名の寺が下寺町にありますので、その寺が移転先でしょう。長香寺は慶長十四年の創建とありますから、福田寺が移転したあと（あるいは長香寺の建設のために立ち退かされたか？）に、長香寺が建立されたと推測されます。

写真を仔細にみるとわかるように、「五重相伝（ごじゅうそうでん）」と書いた看板が、総門の右側にかかっています。これは、浄土宗の重要な法会で、浄土宗の教えを、五段階にわけ、これらを重ねて、もれなく伝えるということからきています。五日から八日を要する法要

長香寺

で、なかなか開催できないので、毎年ではなく、不定期におこなわれます。十年以上も間をおくこともあるそうです。これを受けた者には、生前戒名・與号が与えられます。看板には、平成二十年十月九日入行とあり、一年前の予告です。多分、長香寺でも特別に重要な法会であろうとおもわれます。

長香寺の南、高倉通の西側に、福田寺町の路地の入口が開いています。この路地は途中で折れ曲がって万寿寺通に出るようになっています。

高倉通（たかくらどおり）　松原下ル西入（まつばらさがにしいる）　福田寺町（ふくでんじちょう）③

末広稲荷社

路地の東西部分の中ほどに、木製の仁丹看板「高倉通松原下ル西入福田寺町」③があります。「福田寺町」の町名は、もともとここにあった福田寺に由来しています。木製の町名看板はたいへんめずらしく、このシリーズでは第４回目に一度でてきましたが、これで二枚目です。

福田寺町の路地の奥に、末広稲荷社（すえひろいなりしゃ）があります。献灯には、「末廣大明神」と書いてありますが、祭神が倉稲魂神（うかのみたまのかみ）といいますから、お稲荷さんでしょう。この地域の鎮守さまでしょうか、大切

に守られているようです。

■　鉄輪井と命婦稲荷神社

福田寺町の路地を抜けるとそこは万寿寺通。この通りを東に向かいます。万寿寺堺町の十字路から少し東に、町名看板「萬壽寺通堺町東入堅田町」④を見つけました。

萬壽寺通　堺町　東入　堅田町　④

万寿寺堺町を上がった西側に、「謡曲傳示鐵輪跡」の石碑があり、注連縄をはった入口から路地に入ると、「鉄輪井」があります。『拾遺都名所図会』巻之一では、「鐵輪塚」として載っており、「堺町通松原の南にあり。伝云、昔嫉妬深き女あり、神に祈て毎夜丑の時参をなす、気疲てこゝに死す、其霊を築くといふ。今は人家続て塚詳ならず」と。

『改訂京都民俗誌』〔井上頼寿、平凡社復刻版、二〇〇三〕によると、「嫉妬深い女が貴船神社に丑の刻詣りをしたら、川の水へ入れという神託があり、水に入ると蛇になったという伝説があり、その女が使っていた井戸である」と伝えられています。謡曲『鉄輪』は、同じ趣旨の話で、貴船神社の神託で鬼になった女を、

謡蹟「鉄輪井」入口

命婦稲荷神社（右手前から鉄輪井、その奥に鉄輪社。いちばん奥は命婦稲荷神社の社殿）

祈祷をたのまれた安倍晴明が、三十番神（三十日を日替わりで国家安寧・衆生幸福を守るとされる三十柱の神々）の御幣によって追い払うという筋です。

鉄輪井は、「縁切り」の井戸として、婚礼の列はこの場所を一切通らないという風習がありました。この地は、もと「鉄輪町」と呼ばれていましたが、縁切りでは縁起が悪いということで、慶安年間〔一六四八～一六五二〕に「鍛冶屋町」と改めたといいます。一九三五年〔昭和十年〕に敷地内で発掘された「鉄輪塚」の石碑を収めた「鉄輪社」が祀られています。

同じ路地に、命婦稲荷神社（堺町通松原下ル鍛冶屋町）が祀られています。「縁切り」を「縁結び」に改めて、一六六八年〔寛文八年〕に稲荷大明神として創建。どんどん焼け〔一八六四年〕のときに類焼したが、一九三五年〔昭和十年〕に命婦稲荷神社として再建したとあります。命婦とは五位以上の女官あるいは五位以上の官人の妻のことですが、いつのころからか、稲荷信仰では、狐の意味をもつようになりました。

写真を見るとわかるように、命婦稲荷神社の鳥居の奥、右手前から鉄輪井、その奥に鉄輪社。井戸は涸れているそうですが、鉄輪井の格子状の覆の上にＰＥＴボトルが置かれているのが見えます。多分、縁切りを願って、どなたがお供えしているもの。持ち帰って、だれかにそれとなく飲ませるのでしょうか。

■　五条辺夕顔墳

堺町通松原上ル西側夕顔町に、「源語伝説五条辺　夕顔墳」の碑があります。この碑は、昭和四年〔一九二九年〕に京都史蹟会が立てたもの。この場所は、町名も夕顔町。非公開ですが、坪庭に夕顔塚があり、九月十六日の夕顔忌には、町内会の役員が献花するそうです。

夕顔は、乳母の住む「五条なる家」の近くの荒れ果てた家に住んでいるところを、光源氏が見つけた女性。夕顔が家の前に咲いていたことから夕顔。六条御息所の生霊の犠牲になる女性です。

『都名所図会』には、夕顔塚の挿絵があります。坪庭に残る塚も五輪塔といいますから、この挿絵の五輪塔がそのまま伝えられているのでしょう。引用した挿絵の賛には、「夕顔塚は五条あたり、今の堺町松原に北にあり、源氏物語に出る夕がほの前、此所に住けるよしいひ伝へり。」と紹介したあと、新古今和歌集の歌が添えられています。

夕がほをよめる　　前太政大臣

白露のなさけをきけることのはや
　ほのぼのみへし夕顔の花

新古今和歌集巻第三・夏歌・二七六

この歌は、『源氏物語・夕顔』に出てくる歌、

心あてにそれかとぞ見る白露の
　光そへたる夕顔の花

を踏まえております。

源語伝説五条辺　夕顔墳の碑

『都名所図会』巻之二　夕顔塚の図。
（国際日本文化センター「平安京都名所図会データベース」より引用）

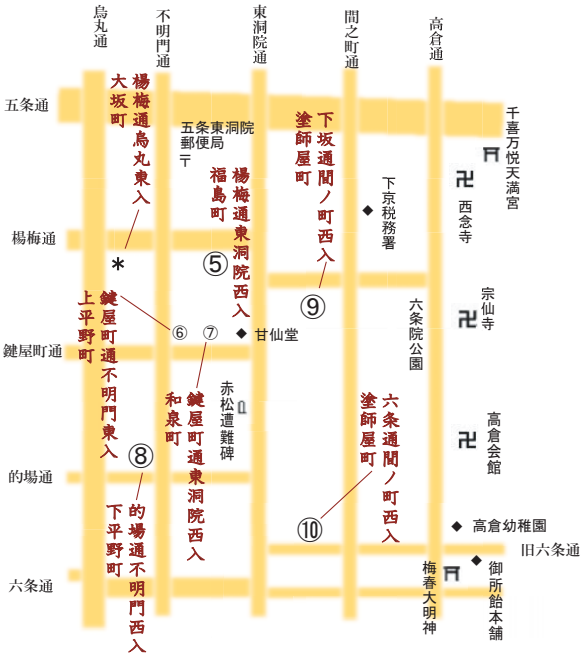
ついでに、来年〔二〇〇八年〕は、源氏物語が記録にあらわれてから、一千年を迎えます。京都市・宇治市・京都府が共同で、「源氏物語千年紀」（紫のゆかり、ふたたび）なる記念事業をおこなうそうで、その予告が出ています。まずは、来年十月の土日に連続講座「源氏物語の世界を知る」。調べたところ、すでに定員に達して、申し込み受付は終了したとのこと。

■　和菓子、豆腐、漬物、なぜかイタリアン

町名看板①のすぐ近くに、和菓子屋。万寿寺通にあるからその名も「萬壽堂」（万寿寺通不明門東入ル大堀町）。この店の一番は、いちご大福。苺を漉し餡でくるみ大福としたもの。店内に「Shinmotsu」とローマ字が見えるのが、ユニーク。ここから、万寿寺通を東に歩くと町家にフォークの看板。この看板は目を凝らさなければわかりません。「月曜日のフォーク」（万寿寺通高倉西入ル万寿寺中之町）。町家でイタリアンとは乙なもの。万寿寺高倉を下がったところには、「五条長兵衛」（高倉通五条上ル亀屋町）。佃煮・漬物。名物は、根昆布の佃煮「ほたるこ」。「野口筑紫堂」（高倉通五条上ル亀屋町）。菓子木型彫刻。干菓子や落雁の製造には欠かせない木型を手彫。一筋東の堺町には、豆腐屋「久保田豆腐店」（堺町通万寿寺下ル）。約一四〇年間、ここで京豆腐製造。

■　五条通から南へ不明門通を歩く

五条通から南へ不明門通を歩くと、途中に五条東洞院郵便局があります。不明門通にあるので、五条不明門郵便局であるはずなのに、どうなっているのでしょうか。開けてない郵便局では、人がこないからかしら。



仁丹町名看板の所在（東洞院通の五条から六条まで）

不明門楊梅の十字路から楊梅通を西に入ったところに、第6回で載せた「楊梅通烏丸東入大坂町」＊の町名看板があります。楊梅通を東に入ったところには、「楊梅通東洞院西入福島町」⑤の町名看板があります。楊梅通は、東洞院通に突き当たったところで終わり。

楊梅通（ようばいどおり）　東洞院（ひがしのとういん）　西入（にしいる）　福島町（ふくしまちょう）⑤

不明門通を鍵屋町まで下がりますと、町名看板「鍵屋町通不明門東入上平野町」⑥があります。同じ鍵屋町の並びには、町名看板「鍵屋町通東洞院西入和泉町」⑦。鍵屋町を東へ、東洞院通で突き当たります。この丁字路の西北のかどに、和菓子屋「甘仙堂」（東洞院通五条下ル和泉町）。菓子組合の名簿などには、この所在地でのっていますが、正確にいうと、東洞院通鍵屋町上ル和泉町。鍵屋町通を五条通で代用しているのは、鍵屋町通はあまりなじみのない通りなので、京都人でも通りの名前から場所を特定できなくなっているのでしょうね。

和菓子屋「甘仙堂」のある丁字路から南下したところ、駐車場の傍らに、「贈従五位赤松小三郎先生記念」の碑（東洞院通鍵屋町下ル西側）があります。赤松小三郎〔一八三一～一八六七〕は、信州上田藩士。兵学者・政治思想家。勝海舟とともに長崎の海軍伝習所で、オランダ語・海兵術を専攻。英学を修めたのち、

鍵屋町通　不明門　東入　上平野町⑥

鍵屋町通　東洞院　西入　和泉町⑦

一八六五年に英国歩兵練法を訳述。「前に倣え」などの号令はこの訳述によるとされています。京都で私塾「宇宙塾」を開いたのち、薩摩藩に招聘され、京屋敷で兵法を教授。門下生には、東郷平八郎など。上田藩への帰国途中、薩摩藩士桐野利秋らにより暗殺。公武合体論を唱えたことと、幕府側のスパイと疑われたためといわれています。この碑のあるところが遭難した地です。

さらに、一筋南の通りには、「的場通不明門東入下平野町」⑧の町名看板。的場通も東洞院通で突き当たって終わり。

楊梅通（六条三筋町の上之町に相当）、鍵屋町通（中之町に相当）、的場通（下之町に相当）が変則的になっているのは、第６回で載せた六条三筋町の痕跡です。おそらくは、遊郭の移転したときか、あるいはそれ以後に、室町通以東も東洞院まで、六条三筋町の通りにあわせて道路整備したものでしょう。

贈従五位赤松小三郎先生記念の碑

的場通　不明門　東入　下平野町⑧

■　下京税務署と千喜万悦天満宮

楊梅通は、東洞院通で突き当たりで、さらに東に進むには、その丁字路を南に折れて一筋目の通りを辿ります。そこに、町名看板「下坂通間ノ町西入塗師屋町」⑨。半分は雨戸の陰になっていますが、かろうじて判読できます。この東西の通りは、下坂通と呼ばれていることがわかります。それにしても、東洞院通と高倉

通の間のわずか一町分だけ。楊梅通は、平安京の楊梅小路にあたりますが、六条三筋町のところで説明したように、東中筋通と東洞院通の間は、北へ移動しています（第６回参照）。下坂通は、平安京の楊梅小路の位置にありますので、本来なら楊梅通となるところです。この部分だけ下坂通となっているのは、なぜか。可能性としては、この通りの西方に大坂町がありますので、「下大坂」が「下坂」に転じたか、あるいは、このあたりが八坂法観寺の領地であったことから「下八坂」が「下坂」に転じたか。いろいろ調べてみましたが、今のところ不明です。

下坂通　間ノ町　西入　塗師屋町　⑨

町名の塗師屋町は、間ノ町通の両側町で、北は下坂通から南は旧六条通までを占めています。その証拠は、町名看板「六条通間ノ町西入塗師屋町」⑩。これは、旧六条通の北側の門扉に貼ってありました。町名は、同じく、塗師屋町。

町名看板⑨のあたりには、下京税務署があり、確定申告の時期にはおなじみのところ。税務署で税金を納めて、国民の義務を果たしたあとはほっと満足して、千喜万悦とまではゆきませんが、「千喜万悦天満宮」（五条通高倉東入ル南側）に参拝。祭神は、菅原道真公。右大臣に昇進したときの絵を祀るので、千喜万悦とい

六条通　間ノ町　西入　塗師屋町　⑩

千喜万悦天満宮

うらしい。五条通の拡幅に伴い、西念寺が縮小し、その門前に遷座。

■宗仙寺

千喜万悦天満宮と西念寺の南には、宗仙寺（高倉通五条下ル堺町）の門が開いています。宗派は曹洞宗。江戸時代に永平寺の代理として、皇室に参内する「役寺」であったといいますから、由緒あるお寺です。天明の大火〔一七八八年〕、安政の大火〔一八五八年、本シリーズ第５回参照〕、どんどん焼（元治の兵火、一八六四年）で類焼しました。『京都坊目誌』によると、現在の建物は、明治三六年〔一九〇三年〕以降の再建。

『都名所図会』には、「籬の池」の項が立ててあり、「高倉五条の南、宗仙寺の堂前にある井をいふ。旧河原院の封境にして、其遺跡なり。当寺は曹洞宗にして、開基は天江和尚なり。本堂の額は正水の筆とぞ。」と解説しています。「池」を「井」と混用しているのは、水位が下がって、湧き水の池が井戸になってしまったのでしょうか。まあ、伝承の類ですから、詮索しても仕方のないことでしょう。

『改訂京都民俗志』には、源融の六条河原院にあった「塩竈井」について諸説をあげていますが、その中に、「下京区高倉通五条下ル宗仙寺（曹洞宗）内の籬の井戸も河原院の遺物といい、やはり塩竈井であるとも伝えている。」と記しています。現在は、「玉の井」の銘のある井戸が、境内の社の漱水のそばありますが、これが籬の井なのでしょうか。

宗仙寺

六条院公園

籬の島は、古来歌枕として有名な場所。ついでにいえば、このシリーズで引用している『都名所図会』の著者 秋里籬島の名前は、これにちなんだもの。源融の六条河原院には、籬の池を塩竈の浦に見立てて、その中に籬の島がしつらえてあったと伝えられています。拾遺和歌集から一首。

題しらず　　よみ人しらず

卯花のさけるかきねはみちのくの
まがきの島の浪かとぞ見る

拾遺和歌集巻第二・夏・九〇

宗仙寺の門前には、「六条院公園」。児童公園の名称にまで、平安

時代の残香を今に伝えています。

■　東本願寺高倉会館―高倉学寮

宗仙寺の南隣は、東本願寺高倉会館（高倉通六条上ル富屋町）、浄土真宗大谷派の教学研究所です。もとをたどれば、一七一五年〔正徳五年〕に枳穀邸内に創設された学舎が、一七五四年〔宝暦四年〕に高倉魚棚に移され、諸設備を整備したうえで、高倉学寮と名付けられたのを嚆矢としています。高倉学寮は、教学を研究するための学僧を養成する機関ですが、経典を講義するのに、仏書以外に広く古典籍を引いて、一語一句に典拠を追求するというやり方だったそうです。この講義方法は、必然的に国語学的な方法論を生み出すに至ったようです。評伝『東條義門―近世国語学を樹立した一人の学僧―』〔三木幸信、桜楓社、一九七五〕に詳しいので、興味ある方はご覧ください。

この学寮で学んだ東條義門〔一七八六～一八四三〕は、若狭（福井県）小浜の学僧で、国語学史に一章を設けてもよいくらいに、大きな業績を残しています。本居春庭〔一七六三～一八二八〕が動詞の活用を研究して『詞の八衢』を刊行したあとを受けて、義門は形容詞・助動詞の活用を研究し、ほぼすべての活用語の整理をおこないました。これらの仕事は、きわめて実証的・論理的で、現在の時点で見ても、決して古びていません。世界に誇るべき成果として、称揚してしかるべきですね。

上掲の評伝によれば、義門は最晩年〔一八四〇年、天保十一年〕に、和語文法に関する講述を高倉学寮でおこなっており、その筆記が『語辞林香記』として小浜の妙玄寺に残っているそうです。現在の高倉会館では、日曜日ごとに、無料の日曜講演が開催されています。こちらは、宗教的な講演が主。そのほかに、年に二回ほど、市民講座が開かれおり、幅広い講師を呼んで、今日的な問題に関する講演がおこなわれています。高倉会館の南側には、高倉幼稚園。元気な子供たちの声が響いておりました。

高倉幼稚園の南塀に沿った旧六条通に、古色蒼然とした看板「御所飴本舗」を見つけました。店舗は三条通にありますが、もともとはここが本拠。今は、工場になっているらしい。

高倉通六条の辻に、高市稲荷神社があります。提灯には「梅春

高倉会館

御所飴本舗の看板

大明神・高市大明神・荒熊大明神」とあり、この三柱が祭神のようです。由緒はわかりませんが、手入れが行き届いているので、多分、地域の鎮守としてまもられているのでしょう。

梅春大明神・高市大明神・荒熊大明神

プロフィール

藤田眞作〔ふじたしんさく〕。一九四四年〔昭和十九年〕北九州市生まれ。学生・大学助手として、十年間、京都で生活。工学博士を取得後、二十五年間、富士写真フィルム（株）足柄研究所にて、記録材料用の有機化合物の開発に従事。次の十年間は、京都工芸繊維大学教授として、有機合成化学・情報材料化学・化学情報学・数理化学の研究教育に従事。そのかたわら和菓子をもとめて京都市内を徘徊し、仁丹の町名看板に興味をもつ。二〇〇七年より、湘南情報数理化学研究所（http://xymtex.com）を主宰。

「仁丹の町名看板をよすがに京めぐり」（第７回）2008/01/20
改 2008/07/13

© 2007, 2008 藤田眞作 http://xymtex.com